

1986年(昭和61年)8月11日(月曜日) IBM20452

週刊読書人

毎週月曜日発行

定価 180円

発行所 株式会社読書人 東京都新宿区矢来町109 郵便番号162 電話(260)5790・5791 振替口座 東京5-57070

本号 12頁

印刷所 株式会社デイ・エス

1986-15-①

モダンvsポスト・モダン

ハーバーマス・リオタール論争を中心に

橋爪 大三郎



リオタール



ハーバーマス

は価値がある。ハーバーマスの哲学の正統性を基礎づける必要はないが、だからといって、主観性の哲学と区別するあまり、ハーバーマスの「無味乾燥」にならぬことは、この「無味乾燥」の可能性は、西洋文化の三分法、カントによる文化の三分法、その中心にカルトを置いた受けるべきであらう、見えていないのだ。

明快で解りやすい

リオタールの主張 ジェン・ローチの言いつには、足しに「折衷的な趣意がある。リオタールがこの二人になんか思っているか知らないが、おとな高定的に知らない。いっしょにハーバーマスは、「客観主義的誤謬」を犯すものだとローチを批判し、あくまでも、理性の普通のな妥当性要求を理論的に基礎づけるべきだ」といっている。

「客観主義的誤謬」を犯すものだとローチを批判し、あくまでも、理性の普通のな妥当性要求を理論的に基礎づけるべきだ」といっている。

「客観主義的誤謬」を犯すものだとローチを批判し、あくまでも、理性の普通のな妥当性要求を理論的に基礎づけるべきだ」といっている。

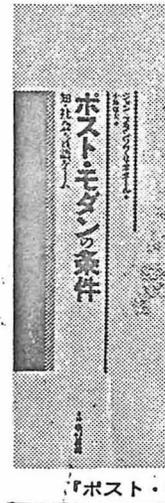
モダンかポスト・モダンかをめぐってハーバーマスとリオタールの間で交わされている論争については、モダン・リオタールの『ポスト・モダンの条件』(小林康夫訳、A5の113頁・2100円・書肆風の巻)の訳註が刊行されたので、わが国でもその輪郭が明確になってきた。本書ではこの論争について、『ポスト・モダンの条件』と他に二つの関連論文を加えて社会学者の橋爪大三郎氏に感想を寄せた。

〈言語ゲーム〉論の自由な変奏

「全体性に対する執念深い敵意」を共通項に

が伏線になっているのだ。彼は、西歐マルクス主義的な全むかって攻勢をとりリオタール理論の言語を立って直しての論争は、言語ゲーム論にある。言語ゲーム論は、後期ヴァンゲン・シャインの着想だが、リオタールはそれをかなり自由に変奏している。そして、「物」に依拠せざるをえない科学を、「モダン」と定義する。そうした「メタ物語」に対する不信感が「ポスト・モダン」の特徴なのだ。

ハーバーマスとローチの対抗関係 上で、ヴァンゲン・シャインの「マルクス主義と全体性」(1984) (部分訳)が『文芸』別冊の「現代思想の契機」に出ている。この一連の「ポスト・モダン主義の言説」(リオタールは「モダン・テリタ、フーコー、ラカン、バルト、ドゥルーズ、ガタリ、クリステヴァ……)が一覧されている。彼の共通項は、「全体性に対する執念深い敵意」だ。ローチを挟んで彼らの反対側に



『ポスト・モダンの条件』

(第3種郵便物認可) 第1647号 (4)

モダンvsポスト・モダンん?

→ 田村 浩二

日本に定着した
ことがあるか?

ポスト・モダンの解は、自分の議論を「言語ゲーム」論に帰着させること、自分自身を「ポスト・モダン」の「信」に規定すること、物語としての「不信」と「ポスト・モダン」のあいまいな適度な規定にあり、自分の立場を積極的に打ちたてていくことである。

同時代の必然に根をす

性急な排斥のための線引き

「ポスト・モダン」の解は、自分の議論を「言語ゲーム」論に帰着させること、自分自身を「ポスト・モダン」の「信」に規定すること、物語としての「不信」と「ポスト・モダン」のあいまいな適度な規定にあり、自分の立場を積極的に打ちたてていくことである。

「ポスト・モダン」の解は、自分の議論を「言語ゲーム」論に帰着させること、自分自身を「ポスト・モダン」の「信」に規定すること、物語としての「不信」と「ポスト・モダン」のあいまいな適度な規定にあり、自分の立場を積極的に打ちたてていくことである。

自己組織性

今田 高俊著
社会理論の復活

自分の専門
なりの、社会
学の本にた
んずかひ
な。その
なかに、期
待すれば、
最近の
「ポスト・モダン」の解は、自分の議論を「言語ゲーム」論に帰着させること、自分自身を「ポスト・モダン」の「信」に規定すること、物語としての「不信」と「ポスト・モダン」のあいまいな適度な規定にあり、自分の立場を積極的に打ちたてていくことである。

「ポスト・モダン」の解は、自分の議論を「言語ゲーム」論に帰着させること、自分自身を「ポスト・モダン」の「信」に規定すること、物語としての「不信」と「ポスト・モダン」のあいまいな適度な規定にあり、自分の立場を積極的に打ちたてていくことである。

社会理論復活のための大胆な構想

正統な本格派の仕事

機能主義のニューリーダー誕生

橋爪大三郎

「ポスト・モダン」の解は、自分の議論を「言語ゲーム」論に帰着させること、自分自身を「ポスト・モダン」の「信」に規定すること、物語としての「不信」と「ポスト・モダン」のあいまいな適度な規定にあり、自分の立場を積極的に打ちたてていくことである。

「ポスト・モダン」の解は、自分の議論を「言語ゲーム」論に帰着させること、自分自身を「ポスト・モダン」の「信」に規定すること、物語としての「不信」と「ポスト・モダン」のあいまいな適度な規定にあり、自分の立場を積極的に打ちたてていくことである。

「ポスト・モダン」の解は、自分の議論を「言語ゲーム」論に帰着させること、自分自身を「ポスト・モダン」の「信」に規定すること、物語としての「不信」と「ポスト・モダン」のあいまいな適度な規定にあり、自分の立場を積極的に打ちたてていくことである。

「ポスト・モダン」の解は、自分の議論を「言語ゲーム」論に帰着させること、自分自身を「ポスト・モダン」の「信」に規定すること、物語としての「不信」と「ポスト・モダン」のあいまいな適度な規定にあり、自分の立場を積極的に打ちたてていくことである。

「ポスト・モダン」の解は、自分の議論を「言語ゲーム」論に帰着させること、自分自身を「ポスト・モダン」の「信」に規定すること、物語としての「不信」と「ポスト・モダン」のあいまいな適度な規定にあり、自分の立場を積極的に打ちたてていくことである。

「ポスト・モダン」の解は、自分の議論を「言語ゲーム」論に帰着させること、自分自身を「ポスト・モダン」の「信」に規定すること、物語としての「不信」と「ポスト・モダン」のあいまいな適度な規定にあり、自分の立場を積極的に打ちたてていくことである。

「ポスト・モダン」の解は、自分の議論を「言語ゲーム」論に帰着させること、自分自身を「ポスト・モダン」の「信」に規定すること、物語としての「不信」と「ポスト・モダン」のあいまいな適度な規定にあり、自分の立場を積極的に打ちたてていくことである。